

CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 19

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

報告	NPO法人トチギ環境未来基地もうすぐ設立10周年。JCVNとの歩み	p2
	同時解決型SDGs事業 高齢者地区での「見守りコンポスト」事業	p3
	横浜・多摩地域のネットワーク「モリダス」設立シンポに登壇	
	平成30年度福岡県自伐林家育成研修	p4
連載	ボランティアリーダーについて思うこと	p6
	事故事例コラム、キーワード	
お知らせ		p8

はじめに

朝廣 和夫（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN 理事長）

この会誌が皆様の手が届くころ 2018 年度が終わり新しい春を迎え慌ただしいことと思います。身近な方が旅立たれたり、また、新しい方との出会いもあるかと思えます。いずれにしても、心の切り替わる季節です。

本誌は、会員活動の近況を中心に話題を提供いただきました。栃木、横浜、福岡と、いずれも活動の積み重ねがなされ、地域、ボランティア団体等との連携の試行錯誤の中で展開されてきた、また、今後も展開されていく取り組みです。

「地域」という視点で、1つ、私の居住する地域でのことを、はじめに、として紹介します。

私は、福岡県糸島市の某農村に住んでおり、この地域では「環境を守る会」という組織を行政区中心に組織し、毎年2月に講師を招き勉強会をしています。昨年は、私が担当しました。最近、近所の若夫婦が子供を連れて他出する事例が散見され、人口減少のシミュレーションを紹介しました。糸島市は最近、人気の市なのですが、この集落は 878 名（2017 年現在）が 425 名（2050 年）と約半減すると推定されました。主な原因は自然減ですが、様々な要因が考えられます。集落

の方々には、他出子に帰郷を促すこと、また、I ターンした新参者の知恵も活かすこと等を話しました。

そこで今年は、農村社会学を専門とする熊本大学名誉教授の徳野貞雄氏に講話をお願いしました。先生は、数々の集落のフィールド調査を重ねられており、説得力のあるお話をいただけます。

今回の先生のテーマは、「極小化・分散化する世帯、「世帯連合」としての家族」でした。要点は、実は人口は、それ程、減少していない。進んだのは世帯構成 1～3 名の少数世帯が増加し、かつ、集落外に分散化していること。しかしながら、多くの世帯は近居している。今後の集落の運営には、「近居した分散世帯を地域構成に含め、同村会を検討すべき。」という、先生が調査で収集されたデータに基づくお話でした。

この提言は、まさに、集落が取り組まなければならない視点です。地縁・血縁を活かす。それは、農村集落の歴史と生業から極めて重要です。そこに、知縁がどう関わるのか。それは、私たちの課題です。そこに、これからの日本のフロンティアがあるように思います。

会員の活動報告

■NPO 法人トチギ環境未来基地 もうすぐ設立 10 周年。JCVN との歩み

塚本 竜也（JCVN 理事、NPO 法人トチギ環境未来基地 理事長）

JCVN の会員団体の一つで、栃木県で若者たちを主体に森づくり活動を行う NPO 法人トチギ環境未来基地は 2009 年 6 月に設立、もうすぐ設立 10 周年を迎えます。（久しぶりの紙面登場となりますが、その間も粛々と活動を行っておいりました！）

この 10 年の活動は、JCVN の理念を共有しながら、独自に応用、実践してきた 10 年でもあったと思います。「若者のチームによる 3 か月間滞在型の森づくり活動」（以下、Conservation Corps プログラム）が団体の活動の柱であるため、現場での活動日数は年間 200 日以上と多い団体ですが、それでも大きな事故やケガもなく 10 年間活動することができました。それは JCVN のリーダートレーニングや、リスクアセスメント／リスクマネジメントの考え方や手法を活動にインストールできたことと、折に触れ、JCVN メンバーと時間を共有できたことが大きいと感じています。

10 年間で 19 回開催、77 人が参加しました

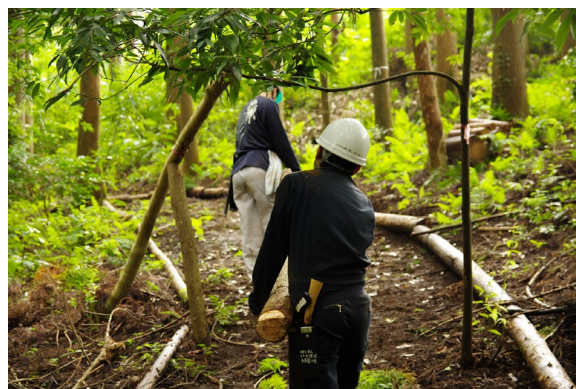
米国の Conservation Corps をモデルとした、若者のチームによる 3 か月間滞在型の森づくりプログラムは設立当初から実施し、現在まで 19 回開催することができました。環境保全の実践と次代を担う若者の育成の両立を目指したプログラムです。その「両立」はなかなか難しいのですが毎回試行錯誤しながら続けてきました。森づくりを進めることは、現在では毎年約 10ha の里山と、4ha の竹林の整備を行えるようになりました。若者の力でどこまで「作業成果」を出せるかは当初から追及してきたチャレンジの方向性です。もう一つの若者の育成では、JCVN での学びや共感も反映させ、プログラムの設計を行ってきました。3 ヶ月のプログラムに参加した若者たちがプログラム終了時まで、5-10 人のグループの森づくり活動を安全に楽しくコーディネートできる力をつけるということを目指して行っています。結果としてプログラム終了後 NPO で働くメンバーは外国人メンバーも含め 21 人になりました。そうした NPO は必ずしも環境保全の分野ではありませんが、森づくり活動の経験、そしてリーダ

ーになっていくプロセスで学ぶもの、身につける一連の技能は汎用性の高い力なのだと実感をしています。

様々な人／団体と一緒に活動してきました

この Conservation Corps プログラムに参加する若者が中心になり、様々な人、団体の皆さんとも一緒に森づくりを行ってきました。参加者の多様化も取り組んできたことの一つです。若者自立支援団体と連携した森づくりボランティア活動は、森の中の小さな仕事づくり「みどりの中間的就労訓練プログラム」に発展しました。子ども食堂や子どもを支援する団体と共に自然体験の機会の少ない子どもたちに里山で思い切り遊んでもらえるように、こどもの里山づくり活動も始めました。また、当団体のある事務所近くの福祉施設と連携して、身体に障がいがあっても里山をエンジョイできる福祉の森づくりも行いました。

これも、JCVN 前理事長の重松先生がよくおっしゃっていた「いつでも」、「どこでも」、「誰でも」できる里山づくり活動を、というメッセージの影響を大きく受けています。先日集計したところ、10年間で延べ 15,315 人と一緒に現場で活動したという結果がでました。多様な人たちとの活動は、リーダーの重要性、コーディネーションの重要性と奥深さを知る機会にもなり、ますます JCVN の取り組みが大切だと感じています。



若者たちの、活動の様子／福祉の森づくり

■同時解決型SDGs事業 高齢者地区での「見守りコンポスト」事業 平 由以子 (JCVN 理事/NPO 法人 循環生活研究所/ ローカルフードサイクリング 理事長)

福岡市東区美和台地区は、40年前に丘を切り開いて開発・造成された郊外型の戸建中心のエリアである。最大標高差 40mで坂道が多く、筋力の低下、関節疾患がある高齢者にとってごみ出しは大変な作業になっており、こうした身体機能や認知機能の低下に伴ってごみ出しが困難になった高齢者も数多くいる。高齢化率が25%を超え、一部の町内は50%前後にも及んでいる。自治活動やボランティア活動の人材不足、自治会の後継者問題、地域コミュニティの希薄化などの課題が山積している。さらに、各町内会においては引きこもりの中高年者の存在が相当数確認されるようになり、ご近所付き合いの減少から、特に単身世帯は孤独死の危険性が予測されている。

このような状況下で、さまざまな企業による卓食・配食サービスが個別に提供されているが、加工品も多く、高齢者の健康維持に対し、毎日食べ続けられる食事の確保も課題のひとつである。また、これまでわたしたちが取り組んできた生ごみコンポストは、この数年講座のために公民館に出かけられる人数が減少し、庭の管理にも困難をきたしているという現状も存在している。このことにより、循環していた住民の生ごみは、ふたたび廃棄物となり焼却場に行く量が増えている。

おたがいさまコミュニティ会議

「おひとりさま」から「おたがいさま」へをキーワードに、地域住民、地元の自治会、学校、企業、商店、行政、NPOなどが協働で取り組むための会議を毎月開催している。多世代・事業者の資源・ニーズを掛け合わせ、孤立をなくし多世代が集う活動アイデアを創出、人的支援による課題を協働して解決できる関係性の構築をおこなっ

ている。

見守りコンポストとお庭の畑仕事

家庭から出る生ごみの処理は、これまでのダンボールコンポストを高齢者向けに開発したタイプを使用する。さらにコンポストクルーにより毎週メンテナンス（回覧・相談・定期交換）を行い、できた堆肥を地域内の荒れたお庭を農地還元として借りて、野菜栽培・販売を実施している。「生ごみを野菜に変えるサービス」（ローカルフードサイクリング）として美和台野菜プロジェクトという名称で実施している。住民の安否確認やコミュニケーションを図ることも同時に行っている。コンポストクルーには専門的な技術が必要なため、適正なスキルを割り出し、プログラムの開発と人材養成講座を実施し、若者や地域住民から技術者を育て、今後の拡大に向けた職場づくりを目指しています。

地域が一体となった人材育成への期待をしている。



■横浜・多摩地域のネットワーク「モリダス」設立シンポに登壇 志賀 壮史 (JCVN 理事、NPO 法人グリーンシティ福岡理事)

2018年12月23日にシンポジウム「安全で楽しい都市林業・里山体験を担う人づくり～森づくりのリーダーを出す「モリダス」からの提案」に登壇し、「環境保全活動の現場リーダーを育てる」の話題提供を行ってきました。

日時：2018年12月23日 13:00～16:30

会場：多摩市立グリーンライブセンター
参加者：45名
主催：モリダス、NPO法人よこはま里山研究所
共催：多摩市グリーンボランティア連絡会
参考ページ：

<http://nora-yokohama.org/join/?p=11820>

このシンポジウムは横浜・多摩地域の森林ボランティア団体のネットワークである moridas (モリダス) の設立を記念して行われたものです。

モリダス代表の松村正治さんから基調講演「なぜモリダスを立ち上げたのか?—市民による里山保全・森林ボランティア活動の限界を超えるために」が行われた後、話題提供として以下の3事例が紹介されました。

- ①「森づくり安全技術・技能習得制度」が目指すもの 森田耕平さん(森づくり安全技術・技能全国推進協議会)
- ②「なぜ「横浜市森づくりガイドライン」が生まれたか?」吉武美保子さん(NPO 法人よこはま里山研究所)
- ③「環境保全活動の現場リーダーを育てる」志賀壮史(JCVN、NPO 法人グリーンシティ福岡)

休憩をはさんだ後、登壇者4名に明治大学農学部 倉本宣先生を加え、ディスカッションを行いました。

JCVN の関わる話題提供「環境保全活動の現場リーダーを育てる」では…

- JCVN のリーダートレーニングプログラムは、BTCV からの技術移転を受けたものをもとに、日本の市民団体の状況にフィットさせながら、体験学習法やファシリテーションも取り入れて改良してきたものであること。
- JCVN 講師によるリーダー研修実施は主催で年間数回、講師派遣で10回程度と少なく、広報・営業が不足していること。
- 多種多様な人が集まりリスクの高い状況で活動する災害ボランティアの場面で、現場リーダーの必要性を感じていること。
- 「研修」形式では伝えにくい内容、伝わりにくい層があること。つい「盛り上がるワーク」を実施しがちだったり、研修化しにくい大切な内

容もあつたりすること。それだけに、日頃の活動や仕事の中でリーダーが育つ「環境」や「仕組み」をつくることを意識したいと感じていること。

などをお伝えしました。

今回のシンポジウムは、これからの森林ボランティアに必要な方向性が示された内容だったと思います。一つが「安全で効果的な伐木(森づくり安全技術・技能習得制度)」。二つ目が「森の将来像を描き関係者で合意形成していくこと(横浜市森づくりガイドライン)」。そして三つ目が「活動現場のやりがいと安全に目を配る人材(JCVN)」です。

横浜・多摩地域は全国的に見ても森林ボランティア活動の盛んな地域と言えますが、その節目の一つとなるシンポジウムだったように思います。今後も JCVN とモリダスは連携しながら、現場リーダーの育成、里山保全活動の活性化に取り組んでいきます。



会場となった多摩市立グリーンライブセンター
<http://nora-yokohama.org/join/?p=11820>

■平成 30 年度福岡県自伐林家育成研修

小森 耕太 (JCVN副理事長、NPO法人山村塾事務局長)

平成 20 年度からはじまった福岡県森林環境税が平成 30 年度から第 3 期 11 年目を迎えました。福岡県森林環境税の取り組みは、年間予算約 13 億円(個人 500 円/年、法人 1,000~4 万円/年)をもとに、「①荒廃した森林の再生」、「②県民参加の森林づくりの推進(ボランティア団体の森林

整備活動を支援、森林に関する情報発信)」の 2 本柱で行われてきました。これまで 10 年間で荒廃森林 3 万 ha が整備され、森林ボランティアなどの活動に延べ 10 万人が参加するなどの事業が行われてきました。

第 3 期からの新事業として、①荒廃した森林の

再生を担う人材を増やすことを目標に「自伐林家育成研修」が計画され、県から山村塾に企画運営を委託する形で、初めての研修事業が行われました。林業分野の人材育成事業では、森林組合や林業事業体などへの就業支援を目指す「緑の雇用制度」があります。緑の雇用はフルタイムで林業に取り組む人を育てるのですが、福岡県の自伐林家育成研修では、週末や仕事の合間などを活用して地域の森林を守る人を増やすことを目指しています。森林組合や林業事業体だけでは不足しているマンパワーを、いわゆる複合経営・兼業で林業に取り組む「自伐林家」を増やすことで補おうというねらいがあるようです。また、地域に密着した自伐林家が増えることで、小規模な森林所有者や集落の共有林の荒廃を食い止め、環境保全型の林業を行いやすくする効果もあるように思います。

「自伐林家育成研修」の概要は次の通りです。

研修日程: 全 11 回 22 日間
場所: 久留米市、八女市
対象: 県内在住で 18 歳以上の自伐林家に興味のある方 7 名
参加費: 無料 ※宿泊食費の費用は各自負担
主催: 福岡県(担当部署: 福岡県農林業総合試験場資源活用研究センター)
企画運営(委託先): 特定非営利活動法人山村塾
研修内容:
 ① 林業基礎(1日)
 ② 刈払機基礎(2日)
 ③ チェーンソー基礎(4日)
 ④ 手道具(2日)
 ⑤ チェーンソー応用(7日)
 ⑥ 作業道づくり(6日)
講師: 山村塾、GIT 九州、日本森林管理技術・技能審査認定協会等

22 日間の研修のうち 13 日間は「チェーンソーでの伐木造材」に関する内容で、特に「安全な伐木技術の習得」に力を入れました。林業は最も危険な産業で、年間 40 人ほどの方が亡くされており、その多くは伐採時の事故とされています。

県民の皆さんから集めた貴重な税金を使って、林業での死傷者を増やしてしまうわけにはいきません。自伐林家育成事業について打合せする中で、研修を修了した方々が、「絶対」にチェーンソーや伐木で事故を起こさないことを願い、徹底した基礎トレーニング（特に、チェーンソー目立て、丸太を使ったチェーンソーワーク）を行う研修を企画しました。

受講された 7 名（男性 5 名、女性 2 名、30 代 5 名と 40 代 1 名、60 代 1 名）は、ほとんどが林業やチェーンソー初心者でした。最初はぎこちなかったチェーンソー作業、雲をつかむようなチェーンの目立てでしたが、徐々にレベルアップし、目立てや伐木のフォームが様になってきました。研修は寝食を共にした少人数制で行われたこともあり、受講生の皆さん、とても仲良く、互いの目標やライフプランを語り合いながら、声をかけあって研修を盛り上げていただきました。私も全日程に進行兼講師として携わり、皆さんとの交流を楽しみ、大きなやりがいを感じながら学ばせていただきました。福岡県内に森林を守る仲間が増えつつあることをうれしく思います。

3 月で研修は終わりますが、これで卒業ではなく、同期生の仲間で連携しながらさらに腕を磨き、今後続く方々の手本となるよう頑張っていたきたいと思います。

丸太を使った伐木トレーニング



連載記事

ボランティアリーダーについて思うこと、事故事例コラム、キーワード

■わかちあうリーダー

原 愛子 (NPO法人山村塾)

2018年は、私の“理想のリーダー像”が変化した1年でした。

山村塾では、都市と農山村の住民が一緒になって週末に米づくり・森づくりの活動を行っており、私は事務局として毎回の活動の運営・進行（リーダー）を担当しています。年々参加者が増えており、活動の輪が広がるのは嬉しい反面、運営が大変だ！とあたふたしていました。

そこで取り組んだのが、“リーダーの役割分担”です。活動中にリーダーが担うタスクをすべて書き出し分類し、「活動当日のタスクと役割分担表」を作成したのです。そして、山村塾での活動経験が長いベテラン会員に表を渡して、「今日は道具係をお願いします」というように運営の一部をお願いするようにしました。

すると皆さん、毎回快く、私が思っていた以上に責任感を持って役割を担当してくださるので。その姿を見て、私も参加者側だったとき、大事な役を任されると嬉しく、やりがいを一層感じたことを思い出しました。一方で、自分が運営（リーダー）側に立つと、あれもこれも自分でやらねばと抱え込みすぎ、参加者との間に線を引きすぎてお客様扱いしてしまっていたことに気づいたのでした。

この役割分担を始めてから、活動はリーダーだけで作るものではない、みんなで作るから大丈夫だ、という心強さが生まれました。「リーダーはとにかく声を出すべし！」と山村塾ではよく言っています。つまり、活動中はその場にいる人とたくさんコミュニケーションをとることが大事ということ。ちょこまか動きまわり、目配り気配りし、一緒にやろう！手伝って！！と声をかけ、役割をわかちあい、一緒に活動を作っていく—それが私の理想のリーダー像だと思う今日この頃です。



■事故事例コラム（2）

志賀 壮史 (JCVM 理事、NPO 法人グリーンシティ福岡理事)

ボランティア団体などの安全管理のために活動に関連する「事故事例」を収集することをお勧めしています。NPO 法人グリーンシティ福岡で平成 30 年 9～11 月に収集した事故事例をご紹介します。日付は発生（したと思われる）日です。

* * * * *

10/8 きのご狩りで斜面滑落 男性が死亡

(NHK NEWS WEB 2018 年 10 月 8 日 17 時 59 分)

岩手県宮古市。79 歳男性が低体温症で死亡。

10/8 まつたけ採りの 85 歳男性が死亡

(NHK NEWS WEB 2018 年 10 月 9 日 15 時 21 分)

奈良県五條市。85 歳男性が滑落して死亡。

10/8 スズメバチに刺され一時意識不明に

(livedoor NEWS 2018 年 10 月 8 日)

長野県長野市。きのご狩り最中の受傷。

10/19 石灯籠の下敷きに、中学生死亡

(毎日新聞 2018 年 10 月 19 日)

群馬県高崎市。高さ 2.8m の石灯籠から飛び降りた男子に灯籠の石が落ちて下敷きとなった。

11/20 誤射で森林官死亡 男性「動物と間違った」

(毎日新聞 2018 年 11 月 20 日)

北海道の林道上で風倒木処理に従事していた 30 代の森林管理職員が誤射され死亡。

* * * * *

例年、春の山菜採り、秋のきのこ狩りのシーズンに滑落事故が起きますが、平成30年の秋はきのこ狩り関連の事故が大変多かったです。10/11の時点でNHKが把握したところでは20人以上の死亡事故が発生していたそうです。きのこ狩りや山菜採りの場合、ついつい深追いしてしまって斜面地や危険な場所に踏み込むこともあるでしょう。また、採取の対象がマツタケなど貴重なものであれば、発生地を知られないために1人で山に入ることもあります。10/8のスズメバチに刺された事例も50代男性が1人できのこ狩りをしていたところ刺され、電話で知らせを受け様子を見に行ったら母親も刺された、という状況だったようです。

10/19の石灯籠の事故は、その場にいた友達や親御さんのことを思うととても苦しくなってしまうと思います。お祭りの準備で近くの公民館には大人も含めて30人ほどがいたそうですが、神社境内で走って遊んでいる子どもたちまで目が行き届かなかったのだらうと思います。石灯籠は上から「宝珠」「笠」「火袋」…といくつかのパーツに分かれています。通常は積み重ねているだけで固定されていません。報道にあった現場写真から判断すると、一番上にある玉ねぎ型の「宝珠」が被害者の上に落ちてきたようです。その重量は

53kg だったとのこと。子どもたちは予想外の動きをするということを常に意識しておかなくては、と感じた事故でした。

11/20の誤射は観光地近くの林道上で起こりました。この時点であってはならない状況で加害者の責任は重いと言えます。互いの距離は130m。被害者はオレンジ色のヘルメットとベストを着用していたそうですが、首周りの白いタオルが「鹿の尻」に見えたのではないかと推測する報道もありました。北海道森林局ではこの事故を受け「狩猟の入林禁止」と「狩猟者の皆様へのお願い」を出しています。

<http://www.rinya.maff.go.jp/hokkaido/apply/nyurin/181204.html>

森林ボランティアの立場としては、猟銃を使った狩猟の期間(11/15から福岡県では3/15まで)を把握しておくこと。視認しやすい服装を着けること。必要に応じて活動中であることの掲示(のぼりや立て看板など)をすることなどを徹底したいと感じました。

* * * * *

なお、新聞記事やネットニュースなどのコピーを個人的に(私的利用)でなく団体や社内での回覧・共有用に行くと著作権法に違反する場合があります。私的利用に留めるか、必要に応じて著作権管理団体と契約を行う等してご利用ください。

■キーワード：持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals

朝廣 和夫 (九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN理事長)

通称、「グローバル・ゴールズ」と呼ばれる持続可能な開発目標(SDGs)について少し触れます。2016年1月から始まり今後15年にわたり国連の政策と資金援助の指針とされ、全ての国が取り組む国際目標です。貧困の撲滅や環境保護など17の分野があり、ロゴマークは新聞や広告などで紹介されています。きっと、皆様の仕事場や活動の中でも取り組まれていることと思います。

私は、恥ずかしながら最近まで、ほとんど意識していなかったのですが、うちの部局は2018年4月に「SDGsデザインユニット」を、井上滋樹教授を長として設置され、SDGsを「デザインの力で具現化していこう」と活動が開始されています。

2018年10月15日には「SDGsデザインフォーラム in 九州」を福岡市で開催し、国連広報

センター所長の根本かおる氏の基調講演、その他、大学、企業経営者らによる事例紹介等が行われました。私からは、里山保全や災害ボランティアの活動を右下の緑の視点から紹介しましたが、その他、吉本興業さんからお笑いを通じた取り組み、ユナイテッドピープルさんからは映画を通じた取り組みなど多岐にわたりました。

12月には博報堂DYホールディングスの川廷昌弘氏の話の伺う機会もあり、ESG投資も年々倍々で拡大し、企業経営者のSDGs認知度も向上しているとのこと。まずは、身の回りの皆様の活動をSDGsの視点ごとに位置付ける作業からはじめられてはいかがでしょうか。



お知らせ

イベント・ボランティア情報

●第11総会のご案内

会員の皆様へ

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。日頃から当法人の運営にご理解、ご協力をいただきありがとうございます。

さて、特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク第11回総会を下記のとおり開催いたします。ご多忙の時期とは存じますが、是非ご出席賜りますようお願い申し上げます。

記

日時：2019年5月16日（木）

18：30～19：30

場所：九州大学大橋キャンパス2号館4F
（福岡市南区塩原4-9-1）

以上

●CVI：環境保全ボランティアリーダー研修プログラムのご案内

昨年度、2018年は18号でも紹介しましたように、前期を6～8月、後期を10月に実施しました。今年度、2019年も同様に、下記のスケジュールで実施する予定です。

共通コース（前期）

今年も共通コース（前期）を実施します。2018年度に受講し忘れた内容がある方、新しく受講を希望される方は、下記の日程でご参加ください。

◇6月20日（木）

内容：リーダーの役割

とき：18時30分～21時

場所：未定

◇7月11日（木）

内容：コミュニケーション

◇8月1日（木）

内容：安全管理・概論

◇8月22日（木）

内容：リスクアセスメント

共通コース（後期）

◇10月を予定

内容：活動計画、チームビルディング、課題解決などの内容を行います。

とき：9時～17時（予定）

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。

JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。

活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

- ・個人正会員（¥10,000／年）
- ・個人賛助会員（¥5,000／一口以上）
- ・団体正会員（¥20,000／年）
- ・団体賛助会員（¥10,000／一口以上）

[会費・寄付振込口座]

番号：01760-9-122407

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS 19

■発行日：平成31年3月28日

■発行頻度：年3回

■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202

tel/fax: 092-215-3966

e-mail: jcvn@greencity-f.org